

▼作品情報

作品タイトル…望郷―那須野が原の翌檜―

▼作者情報

作者…今野綾

那須野が原

+++++

ずらりと立ち並ぶ杉に山頂からの風がさわさわと抜けていき、熊手のような杉の葉を揺らしていく。

正雄は背負い籠の肩ひもをしっかりと掴んで杉並木に挟まれた砂利道を駆け抜けていく。籠の中で畑にて採れたばかりの菜っ葉がギシギシと音を立てているし、ぼこぼこ籠に当たっているのはたぶん茄子だ。今朝採った野菜の中で一番見栄えのいいものを青木様のお館に届けに来たのだ。

杉並木を抜けると白亜の館、青木周蔵様のお住まいが三方を森に囲まれて建っている。独逸《ドイツ》鼻唄《びいき》で有名な青木様は、一エリザベート《奥方》様も独逸から貰っているし建物も独逸仕込みなのだそうだ。何もかも独逸に染めているので、遠方よりお越しのお偉い方々からも『独逸一翁《オウ》』と呼ばれていたと、館で働いている幼なじみの八重より聞いている。

マンサード風屋根に鴉《カラス》がとまり、風見鶏よろしくキョロキョロと辺りを見渡していた。正雄がいよいよ館の前まで近づくと鴉は堪えきれずに飛び立った。カアと鳴くのは文句なのよと八重が話していたが、正雄は単なる掛け声だと思っている。

飛んでいく鴉をチラリと見てから、白の手すりがついた玄関ポーチを横目に建物沿いを行き、調理室の横にあるポーチを駆け上がって扉を開けた。

「こんにちは―」

正雄の声に、調理服姿の白に負けない白髪の男が、鶏の骨を鍋から取り上げながら振り返った。

「ああ正雄、丁度いい。悪いが倉庫から玉葱を取ってきてくれ」

正雄は眉間に皺を寄せながら「まずは荷物を下ろしてからだ」と男に言い返して背から

籠を下ろす。木綿生地の中にはうっすら汗を掻いていた。

「今日は何を持ってきたんだい？」

「菜っ葉と茄子。それとご所望のトマトだよ。トマトって言うのは酸っぱくって俺は好かねえな」

「熱を加えると甘くなるんだよ、食わずに言うな」

「だってそんな洒落たもん俺ら小作は食えねえし」

料理番の辰雄は娘の八重と同じ歳の正雄にニンマリ笑って「今夜少しだけ食わせてやるからここに来いよ」と誘うが、正雄の方は気乗りしない顔で「んなこと言って、また鍋を磨くのを手伝えとか言うんだろ？」と答えると、さつさと倉庫の方へと向かい始めた。

「玉葱四個とじゃがいも三個だ、よろしくな」

辰雄の声がそんな正雄を追いかけてくるが、正雄は振り向きもせずに出て行った。

入れ違いで小食堂に繋がる扉がバタンと音を上げる。娘の八重が息を弾ませて入口から調理室を見渡す。

二十歳になってますます母親に似てスツキリとした美しい顔立ちになったが、いつも一緒にいる青木様の愛娘が絶世の美女であるので、八重の美貌はかすんでしまっても噂にもならない。

「杉並木を正ちゃん走っていたのを見たんだけど……もう帰っちゃった？」

辰雄は娘の方を向くと腰に手を当てて「倉庫で玉葱を抱えているところだろうよ、行って手を貸してやれ」と言っている。すると、八重はあからさまに嬉しそうにするから辰雄の心中は複雑だ。二人が恋仲なのはわかってはいるが、こんなに嬉しそうな顔を親の辰雄にはしてくれないのだから寂しいものだ。

「あ、父さん。ハナ様がお茶にしたいって言っていたからお願ひ」

「ああ、そろそろだと思っていたよ。お前も一緒に飲むのか？」

「ううん、今日はお母様とお茶になさるって」

「—ジンジャービスケット《シユペクラティウス》を焼いて置いたからそれを出すことにしよう」

「私はバウムクーヘンが好き」

「お前の好みは聞いてないぞ」

八重はふふと小さく漏らしながら辰雄の横を通り過ぎて正雄が居る倉庫へと真つすぐ抜けていった。

辰雄は、青木様の一人娘ハナと独逸から連れてきた奥方様の為にガラス瓶にしまっておいたジンジャービスケットを取り出しつつ、片手で皿を出してそこに並べ始める。

辰雄は青木様に料理の腕を見込まれて雇われ、東京からこの那須野が原の館へと連れてこられた。

初めは青木様に翻訳してもらった独逸の料理本で、奥方様が納得する料理を拵えるのが目標であった。今では独逸にしかない食材の代わりに何を使ったら似せられるのかとか色々分かるようになったが、雇われた当初は何を作ってみても本当に酷いものだった。

それでも青木様が辰雄を解雇せずにいたのは、辰雄に期待しているからというよりも、青木様の愛娘が五つ下の八重を妹のように可愛がっていたからに他ならない。ハナ様がそうやって八重を可愛がってくださったお陰で、八重は片言ながら独逸語を話すようになり、そうなるると独逸語しか話せない奥方様も八重に目を掛けてくださるようになっていった。

八重の母は八重を産んだ後、産後の肥立ちが悪く、一旦は歩けるようになったものの、またすぐに体調を崩してこの世を去った。八重にとって、母の居ない生活で寂しさを感じずに済んだのはひとえに青木様の奥方様とハナ様、様様といったところだった。

辰雄はティーセットを出しながら開け放たれた窓の外へと目をやった。夏の日差しではあるが、山の中腹にあたる那須野が原は、東京で言うところの穏やかな春の陽気に近い。山は常緑樹が多いので季節感は乏しいと言える。冬だけは雪に覆われるから流石に景色が一変すると言った具合であった。

お二人には感謝してもきれないところはある。だがしかし……

八重はもう二十歳。恋仲の正雄だって二十歳なのだ。ここいらではとっくに所帯を持っている年頃だ。

そんな二人の婚期が延びている原因はただ一つ、ハナ様にあった。

「辰雄さん、辰雄さん」

戸口から呼び掛けられて、辰雄はドキリとした。ハナ様の悪口を言った訳ではないが、それでも考えていた矢先、本人が姿を表すと正直肝が冷えた。

「ハナ様、御用でしょうか？ 菊が見当たりませんでしたか？」

菊はこの館に住み込みで働く唯一の使用人で、青木家からの信頼も厚い初老の女であった。甲斐甲斐しく勤め上げる無口な姿は使用人の鏡であるが、仲間として見ると些か付き合いにくくもある。

ハナ様は社交界の華と持て囃されている美貌をゆっくりと溶かして、左右に首を振って見せる。それから小声で「菊は堅苦しくっていけないわ。若い女が男と話すなんてとんでもないなどと言うのよ？ 話さないでどうやって相手のことを知るのかしら？ そうは思わないこと、辰雄さん」と、まるで同志のような気楽さで話しかけてきた。

辰雄としても菊は堅すぎると感じているが、一方ハナ様は緩すぎるとも感じていた。

「いやその…ハナ様の言うとおりですが、さすがに正雄と部屋で二人きりとかそう言うのはいけません」

「あらそれはどうして？ 八重だってマサと二人きりになるじゃない？ 八重は良くて私は駄目だなんて不公平この上ないことよ」

口を尖らせて不満をあらわにするハナ様に辰雄は困ってしまった。

ハナ様は八重を自分と同等のように扱うが、実際は天と地ほどの差があるのだ。

華族と単なる料理人の娘。華族のハナ様と小作人の正雄に間違いがあってはならないし、そもそも八重と正雄は婚姻関係こそ結んではないが相思相愛の仲で、身分的にも互角なのだから夫婦になることへの支障はなんらない。二人きりになり子供が出来たところで、辰雄からすれば晴れて娘が夫婦になれたと喜ばしく思うところだ。

「ハナ様は青木家にとって宝なのです。ご苦労なさらぬよう、青木様もハナ様に良縁を願って華族の御子息から……」

「嫌だわ、そんなの。生涯伴侶になる相手を勝手に決められるなんて。お父様だって一度目の結婚に失敗なされたのは言いなりになったからなのでしょう？」

ええ。とも、いいえ。とも、つかない言葉を発しながら辰雄はこの話が早く終わることを願っていた。

確かに青木様は家督を継ぐため婿養子として家に来たが、その後独逸で今の奥方様と恋に落ちて、相当苦労されて一緒になったのだと言うのは有名な話だった。

「いいのよ、皆この事には返事が出来ないのは知っているから。お父様とてこれを言う」と

だんまりなんですもの」

フンと鼻を鳴らして「正雄より二枚目の人じゃないと嫌だわ。正雄より話が面白くなくちゃいけないわ。これは絶対なのよ。そうでないなら私は正雄と結婚するとお父様に言うてあるの」と言い切った。

聞いていた辰雄はあまりに思い切った発言に口が小さくポカンと開いてしまった。

小作人の次男である正雄を婿に貰うなど、青木様だってひっくり返ってしまうことだろう。

山縣農場を経営されている山縣有朋《やまがたありとも》公を尊敬なさっているという話だから、山縣公が足軽出身という事を考えれば出が小作人でも、もしかすると青木様は良いというかもしれない。しかし、奥方様は独逸の貴族出身で気位が高いお方、こちらは反対するのが目に見えている。

それよりも、正雄と八重は恋仲なのだ。万が一そんなことになれば二人は引き裂かれることになり、それは親として耐え難い苦痛だった。娘には笑っていてほしい、親とはそういう生き物で、いくらハナ様に恩義を感じていてもそこは八重の幸せを叶えてやりたいと思うのだった。

ハナ様は言い終えると気が済んだようで、皿に乗ったこの辺りにはない風車を模したジンジャービスケット一つ取り上げて端の方を齧りニッコリをほほ笑んで「やはり辰雄さんのお菓子は美味しいわね。お母さまが独逸で食べたのと同じ味だいつも絶賛していらっしやるのよ」と褒めた。

辰雄の頭の中は褒められたことよりも先ほどの事でいっぱいになっていて、辛うじてぎこちなく頭を下げた礼をした。

そこへ二人そろって仲良く野菜を運んできた八重と正雄が調理室へと戻ってきた。

「よお、ハナ」

「マサ来ていたのね、今日はもう少し居られるの？」

「いや、戻って畑の石を取り除かねえと」

「あら、私とお喋りするより石と戯れる方をとるのね。酷いわ、そう思わない？ 八重」

八重は抱えていたじゃがいもを、流しに置いてあった桶へといれながら「思うわ、正ちゃんってばいつも忙しいんですもの」とハナに同調する。

正雄は持っていた玉葱を八重がじゃがいもを入れた桶にやはりゴロゴロと落とし、手を

叩いてついていた砂を落としていた。

「この辺は石だらけなんだ、取り除くのだって容易じゃねえ。少しでも畑を広げねえと、元々枯れた土地だ、生きていくほどの野菜が採れねえの！」

「そうなの？ いつもたっぷり野菜を持ってくるじゃない」

正雄はハナ様の言葉に呆れた顔をして、籠の中に入れたままの野菜を取り出してハナ様の前へと突き出した。

「こうやって青木様の館にはたっぷり野菜を持ってくるが、本当はそれだって大変な日もあるんだぞ。いずれここを継ぐことになるんだったら覚えておけよ。俺たちがどれだけ苦労して野菜を持ってきているか、どれだけ苦労して牛たちに草を食わせ肉や乳を運んできているのか」

ハナ様は目の前に出された菜っ葉に手を出して受け取ると「わかっていて言ったのよ、貴方ったらちっとも遊んでくれやしないのなもの。昔は三人でよく家の前にある小川で水遊びをしたのに、お忘れかしら？ たまにはああやって無邪気に遊びたくはない？」と正雄の目を真っ直ぐ覗きこむ。

正雄はため息をそっと吐いて、ハナ様が持つ菜っ葉を取り上げると、それを辰雄へと手渡した。

「遊んで居られる時は終わったんだ。俺は農民でハナは華族、こうして普通に話すのだった。本来はあり得ないことだろ？ 立場が違うんだ、俺達は遊んでなんかいられない」

ハナ様はくるっとシルクのドレスの裾を翻し向きを変えて、側に控えている八重の腕に手を回し抱え込んだ。

「八重とマサは特別だわ。忙しいと言うなら、お父様になんとかして下さるよう言うから」

「俺は遊んで暮らすなんてまっぴらごめんなんだよ。それにな、青木様は今だって十分良くしてくださる。その御恩に報いるように働くのが俺達の勤めなんだ」

ハナ様は頬を僅かに膨らませて「マサは頑固者だわ」と、八重に訴える。腕を抱えられた八重は困ったようにハナ様を見て「冬になれば時間は作れます。それまではハナ様、ご

辛抱下さい。私が全力でお相手しますから」と、なだめにかかった。

女二人のやり取りを聞きながら正雄は黙って籠の中からトマトと茄子を取り出して、それら全てを辰雄に託した。男同士は黙って目で会話を交わし、野菜の受け渡しを済ませていった。

「じゃ、俺は行くから。八重の事も早めに解放してやってくれよ。菊さんに怒られるのは八重なんだから」

それを聞いたハナ様は目を丸くして「あら嫌だわ、あの菊が怒るの？ モソモソ意見するだけではなくて？」と、矢継ぎ早に質問し、八重は「怒鳴ったりはしませんよ。でもそうですね……たまにはお小言を《長々》頂戴するかしら」と、控え目に表現してみた。

そうなるとハナ様の興味は菊へと移り、お小言の内容などを八重から根掘り葉掘り聞き出そうと夢中になる。

まるで小鳥たちのさえずりだと思いつながら正雄はその場を後にし、辰雄も弱火にかけたままの鍋をそっとかき混ぜていくのだった。

ハナの結婚

那須野が原にスキがちらほら見え出したある日、八重は杉並木の北端にある翌檜（あすなろ）の下へハナ様に連れてこられた。

風は日に日に冷たさを増していくが、日中は陽射しがあれば過ごしやすい暖かさであった。

この辺りではまだまだ着物姿の村人が多い中、ハナ様は一肩掛け（シヨール）の下はもちろん洋服をお召しになっており、八重も女中用に支給された黒のメイド服を身に着けていた。独逸人の血を引いているだけあってハナ様は八重より頭一つ大きく、成長しきった今でも本当の姉妹のように見える。

二人は冷たい風にスカートを揺らし、仲良く歩いていく。そんな姿を、青木様が独逸より連れてこられた鹿が草を食むのを中断して、もぐもぐと口を動かしたまま眺めていた。

「これ以上、鹿（レ）が増えると困るわね」

視線を感じたハナ様がそう言い、八重もハナ様の視線を追って鹿へ目をやった。数頭の鹿があちこちこちに散らばり、めいめい草を食んだりゆったりと寝そべったりしている。

「千本松の松方邸のお庭にはそれはすごい量の羊がいるってお話しよね」

「羊（シャーフ）ね。ええ、そのようよ。可愛いけれど、みんな糞をまき散らすんですもの」

「でも、草刈りが必要ないからいいんだって正ちゃんが言っていたわ」

ハナ様は鼻に皺を寄せて「それだけ糞をするってことじゃない」と嫌がった。でも、翌檜に手をつけて「でもね、八重。鹿も羊も翌檜も、東京では見ることが出来ないから……なくなってしまうては困るわ。私はここが大好きなんですもの」と、呟く。一呼吸置いてから、八重へと整った顔を向けて真面目な顔で言う。

「私、たぶん結婚することになったの。先日お知り合いになった方」

八重は切れ長な大きな瞳を見開いてから、それは嬉しそうにハナ様の手を取った。

「本当なの？ それは素晴らしいことだわ。おめでとう、ハナちゃん！ おめでとうござ
います、ハナ様」

「ありがとう、八重」

八重は美しいハナ様の花嫁姿を想像して、心から喜びを感じていた。

ハナ様はこれまで沢山の縁談を断り続けていた。周りにはもう結婚せずに独身を貫くつもりなのではないかと、それはやきもきしていたのだ。だから、八重はホッと安堵しながら心から喜んでいた。

しかし、そんな八重とは違いハナ様の方は笑顔のまま視線を下に落として、何か物を言いたそうな表情をする。八重はハナ様の様子にすぐさま気が付き不思議そうに「あまりお相手がよくないの？」と、表情を曇らせていく。

「いいえいいえ、違うのよ。お相手のトラツヘンベルヒ伯爵は申し分ないお方だわ。ただね……わかるでしょ？ 独逸のお人なのよ。今は日本にお仕事でいるだけでいずれお国に帰ることになるんだと思うわ」

言い終えるとハナ様は上目遣いで八重の表情を窺い、もう一度視線を八重から外した。

「八重、一緒に東京へ行ってはくれないかしら？ ほら、時々ついて来てくれていたでしょ？ お願い、ねえ八重」

ここまで来て、ハナ様が八重の顔を真っ直ぐに見られない理由がなんとなく察しがついてきた。

八重に東京へ着いて来てほしいわけではなくて、独逸に一緒に行って欲しいのだ。ハナ様にしては歯切れの悪い言い方を考えるとそうに違いない。現に今まで何回も東京にお供していたが、こんなに申し訳なさそうに願い出たことはなかったのだ。

しかし、八重にはどうしてもこの那須野が原に残りたい理由があって、それはたぶんハナ様もよくご存じのはずだった。ずっと正雄と一緒にすることを夢見て来た。叶わぬことなどないと信じて生きてきた。たとえどれだけ時間がかかろうと。

二人の間に沈黙が流れ、八重の手を取ったままのハナ様の手に少しばかり力が入ったようだった。

八重は答えに窮し、二人の手をじっと睨み付けていた。

ハナ様の陶器と見紛う艶やかな手。八重の手はゴツゴツとしていてしかも乾燥しており、まるで那須野が原そのものだった。それでもハナ様は八重の手は可愛いといつでも褒めてくださるのだ。

「あの……八重。東京よ、東京なの。しばらくはあの方だって東京で働くと言っていらしたのだから、間違いないことよ。ねえ、八重はウンと言ってはくれないの？」

ハナ様は自分の意見を通すことになれている。そのことに悪気はなく、生まれ育った環境がそうさせるのだ。そんなハナ様なのに、八重の顔色を一心に窺って祈るように瞳で訴えかけてくる。

昔からそう。ハナ様は八重には無理強いさせないように、極力『ハナ様らしさ』を抑えようとすることがある。

大きくなってから不思議に思った八重が、正雄にどう思うか聞いてみると『妹だと思ってるんじゃないのか』と言う答えだった。

二人妹がいる正雄曰く、妹には根気強く接するのが当たり前で、年下の人間に我を通すのは格好が悪いことなのだそうだ。

いつの頃からか互いの立場を理解し、姉妹のような振る舞いは随分と影を潜めていったが、それでもハナ様は八重を妹のように思うことは変わらず、八重もハナ様を姉のように大事に思っていた。

「東京……なのね」

絞り出すように口にした八重に、食いつかんばかりの勢いでハナ様が反応する。

「そう、東京！ 暫くご挨拶回りもあるし、何より奥さんとしてのアレコレを学ばなくてはいけないでしょう？ 私は不安なの。一人で覚えきれるか不安で……やはりこの結婚は、なかったことにしておもうかしらなどと思うこともあるわ」

声が大きかったらしく、近くでのんびりと歩いていた鹿が驚き、耳をパタパタ忙しなく動かしながら逃げ出していく。

八重に対しては我慢するという気づかいを見せる一方、八重がどうすればハナ様の求める返事をするのか、ハナ様は熟知していた。これもまた悪気なく、ごく自然にそのように

誘導していくといった具合なのだ。

八重はハナ様の婚約破棄を匂わせる台詞に小さく唇を噛んで数回瞬きをした。

「なかったことにしてはいけないわ……。どんなに皆様がこの時を待ち望んでいたかわからないもの。青木様も奥方様もずっとこの時をお待ちだったと思うのよ。……でも、東京に私が行って、力になれるのかしら……」

八重の力の籠らない言い方に、ハナ様はまるで勇気づけるように手を握りなおして八重の目を今度こそ真つすぐ見つめた。

「八重が来てくれたら百人力よ。昔からそうだったじゃない。歴史が苦手で家庭教師から叱られていた時も、後から一緒に勉強しようと言ってくれて、あなたは本当に私に付き合ってくれたわ。二人で一緒に暗記して、それで次の時まで全部覚えることができたじゃない。八重は私に力をくれるのよ、嘘ではないわ」

「……東京よね」

ハナ様の力説を聞き終え、八重が確認の為に口にする、ハナ様は力強く頷いて「東京よ」と、繰り返した。

不安はあるが、ハナ様は嘘つきではない。これだけはっきり断言するならば東京なのだ。ただ、その先の事はわからないだけで。

ゆつくりと手を引き抜いた八重は、辺りを目に焼き付けるように見渡していく。

鹿やススキ、杉にブナ、それから翌檜。白亜の館、灰色の独特な造りのマンサード風の屋根。ここだけの景色、きっと那須野が原にしかない風景。決して住みやすい土地ではない。それでもハナ様同様、八重もここが好きだ。正雄もいるし、父もいるこの地が自分の居場所だと信じて疑わずにこれまで生きてきた。

「東京に行くわ」

華やかで驚くほどハイカラな帝都 東京も刺激的で嫌いではない。ただ、八重は那須野が原がどこよりも好きなのだ。

それでも、そう答えるより他なかった。ハナ様が望むなら、着いていきたいと思うし、

着いて行かねばならないと思う。

何不自由ない生活をしてこられたのは父の辰雄が青木様に雇っていただいたお陰。ましてや八重はハナ様のお陰で普通では出来ない贅沢をたくさんさせていただいている。

継ぎ接ぎのない衣服、飢えを知らない幼少期、分けていただいた異国のお菓子は砂糖をふんだんに使った高級品。どれをとっても、地元の子達より遥かに恵まれていた。忙しい父に変わり、母不在の孤独を紛らわせてくれたのもハナ様御一家なのだ。

断る理由などない。断れるわけがなかった。

「ありがとう！　ありがとう八重！　本当に嬉しいわ」

やっと八重を説得できて、那須岳から雲が取り除かれたような晴れ晴れとしたハナ様はやはり美しく、八重は心底の方が好きだと思った。

八重は東京にいった際、連れていかれた屋敷などで、尊大な態度の華族の子女を何度も見てきた。言ってしまうえば高慢ちきで嫌な感じの人々。

一方、ハナ様は自分の気持ちを通すのは得意だが、それは天性のもので偉そうなところは一切ない。八重が失敗しても笑って許してくれ、心配までしてくれるのがハナ様だ。

「ハナ様が幸せになることが八重にはこれ以上ない幸福ですから」

心からそう思って言ったのに、八重は気持ちが落ちていくことを否定できなかった。正雄と離れることになるのは寂しく、この先を思うとどうしても心の中に冷たい秋風のようなものが通りすぎていくのだった。

秋の澄みきった空の下に居るのに、風が余りに冷たくて凍えてしまいそうだ。それは錯覚であって現実ではないのに、八重は一人寒さを堪え自らの身体を擦っていく。

ハナ様は自分の肩にかけていた羊毛の肩掛けをスルスルと抜き取って、体をさすっている八重の肩へ「八重は寒がりなのだから、これをお使いなさい」と、ふわりと掛けた。

「それとね、八重……私の結婚の話はしばらく伏せておいて欲しいのよ。誰にも言っちゃいけないわ」

八重が掛けてもらった肩掛けを胸元で押さえながら顔を上げると、ハナ様は一つ頷いて見せる。

「お断りされることだってあるでしょう？ ほらだって、私は一おきやん《お転婆》でいいくないって菊も言うことだし」

確かに八重も菊が独り言のように小声でそういうのを聞いたことがある。だがしかし、ハナ様の美貌をもってすればそのようなことは些細な事だと思う。

「お断りされることは、きつとないと思うわ」

ハナ様は八重が握っている肩掛けを母親のような眼差しで見つめてから、それをゆつくりと胸の前で結んで言う。

「では言い直すわね。《お断りすること》《もないとは言い切れないでしょう？》」

優しい眼差しをした目の端が可笑しそうに下がっているのを見て、八重はこれはハナ様の言うところの冗談だと分かった。

「ハイドンの弦楽四重奏曲第38番変ホ長調ね」

八重が「Der Scherz」《邦題「冗談」》を言うと、ハナ様はにっこりとほほ笑んで鼻歌を口ずさみ始めた。明るいその曲に合わせて八重がバイオリンを奏でる真似をする。ハナ様はそれを見て勿体ぶってドレスを掴んで小さくお辞儀をすると、その場で優雅に踊り始める。小さな頃からそうやって淑女ごっこをして遊んだ二人だ、阿吽の呼吸で役を演じていく。

帝國ホテルで執り行われた舞踏会に、ハナ様は八重を伴ったことがあった。壁の隅で小さくなって待機していた八重に、あの方は素敵だったとか、あの殿方はダンスの最中足を三回も踏んだとか、なんでも話してくださったハナ様。

見たこともない楽器を八重がはしたなく指さしたら、持っていた扇子でそつとそれを遮り「指をさしたらいけないのよ、八重。いくらあのヘンテコな楽器が瓢箪《ひょうたん》に似ているからと言って」と耳元で囁いて笑っていた。後からあれはバイオリンというのだと教えてくれたが、八重はバイオリンを思い出すたび、瓢箪が思い浮かぶようになった。

ハナ様とのたくさんの思い出。一抹の不安はハナ様の笑顔を見ていると、少しずつ薄れていく。きつと何もかも上手いくわ。八重はそう自分に言い聞かせながら、ありもしないバイオリンを奏でていくのだった。

*

青木邸の窓から漏れる洋灯《石油ランプ》の明かりがチラチラと揺れている。

青木様のお使いになつてゐる馬車はガス灯であるのに、館での明かりは洋灯だ。東京では電気で室内を照らすようになったのだが、那須野が原に電気が引かれる予定は未だない。辰雄は時折、調味料や調理器具を揃えに上京するのだが、行くたびに東京の夜は昼間のようになり明らなくなつていく。

辰雄は足早に青木邸から望める距離にある使用人小屋へと、カンテラを手に急いだ。風に追いつてられるように、八重の待つ家を目指す。

簡素な造りの小屋はいわゆる九尺二間。森を切り開いた場所に数戸身を寄せ合うように建つていて、一番端に共同の風呂と廁がある。陽当たりはすこぶる悪いが、その分雪や風からは守られていて、寝泊まりするには問題なく、青木様からの急な呼び出しにも対応できると言つたものだった。

夜の森は低く唸る。八重は小さい時それを怖がつて、一人で家に居られないと泣き、辰雄の仕事が終わるまで調理室で時間を潰していた。それを聞いた青木様が不憫だとおっしゃつて、八重の為にふかふかのソファアを用意してくださいました。八重は調理室の隅に置かれたその上で、待ちくたびれてはよく寝たものだった。

よおく背負つて帰つたつけなあ。

辰雄は規則正しい小さなかわいらしい寝息を思い出して、一人頬を緩めた。

戸口に着くと「八重、戻つたぞ。開けておくれ」と声を掛ける。すると、パタパタと走つて戸口まで寄つてくる音がし、門《かんぬき》があげられる。戸を開けると、八重が「おかえりなさい。お疲れ様です」と、労をねぎらつた。

八重の出した手にカンテラを託すと、辰雄が門をし、八重はカンテラの火を消して棚へと持つていく。

「飯は食つたのか？」

「うん、朝の残りで。父さんは？」

「ああ、あちらで食べてきたから平気だ」

お風呂は？ と、立て続けに問うので、それもいと辰雄は断つて、座敷へと上がつて行つて、腰を下ろした。部屋の真ん中に鎮座する年季の入つた長火鉢に手をかざすと、一息ついた。これからの季節はこの長火鉢の火が何よりも恋しくなる。

部屋の端にある行灯《あんどん》と長火鉢が仄かに二人を照らしていた。

「あのね、父さん」

八重も火鉢の横に座ると引き出しを開け湯呑みを出して、火にかけてあった鉄瓶から白湯を注いで辰雄へ出す。湯気が上がるそれを受け取ると、辰雄は両手で包み込んで手を温めながら「うん？」と返した。

「私、ハナ様と東京へ行くわね」

「そうか。今回は何日くらいになるって？」

八重は一瞬自分の湯呑みに白湯を入れる手を止めた。それから思い出したかのように再び動き出して、とくとくと湯気の上がる白湯を注いだ。

「あの……それは私にはわからないのよ、父さん」

「まあ、いつもの事だな」

喉に何か引っかかったように喉元を押えた八重に「喉が痛むのか？ 糖蜜が瓶にあつたろ？ 舐めるといい」と、視線だけあげて辰雄は八重に促した。八重の顔がますます歪むので、辰雄は持っていた湯呑みを長火鉢の上へと置いた。

「どうしたっていうんだ」

八重は口を僅かに開けて、それから閉じ、また僅かに開けて「あのね……」と、口にしてからまだ言い淀む。それでも迷いを払拭するように顔を振ってから、やっと辰雄の方へと顔をしっかりと向けた。

「ハナ様には本当にお世話になっているでしょう？ ハナ様だけではなく、奥方（エリザベート）様や青木様にも。だから私、思ったの。請（こ）われたら何だってお受けしなきゃならないんだって。何にもお返し出来てないのに、自分の気持ちを押し通すなんてのは恩を仇で返すような事でしょ？ そんな真似は絶対にはならないと思うの。そうでしょう？ 父さん」

辰雄の脳裏にある、八重の結婚を阻むハナ様への不誠実な気持ちを見透かされたようで、やや居心地の悪さを感じながら「そうだな」と、ぎこちなく返した。

八重は辰雄のそれには気が付かなかったようで「そうよね」と、思いを確かにしたように頷く。

「父さん、私はここが好きなの。この那須野が原が好き。本当は離れたくない」

今も昔と変わらず、夜の森が唸っている。すきま風に焦茶色に変色した壁板がカタカタと揺らされて、風はそのまま部屋を抜けて戸板を揺らして出ていった。

かつてはあんなに怖いと怯えていた八重が、今は風になどもろともせずには決然とした表情で再び口を開く。

「ハナ様に恩返しの時が来たら、私はきちんとそれをすべきなんだわ」

辰雄もそこに異存はない。青木様のご厚意に報いることが出来るなら、多少の苦労は苦ではない。現に今だって、一人娘の八重が未だ結婚出来ないことにも堪えているのだから。

ハナ様が一言『私より先に結婚しては嫌よ』と言ったばかりに……、八重は前に進めなくなってしまった。正雄とて家族をもって独り立ちしたいに違いないのに、結婚相手に定めた八重が足枷をつけられて、にっちもさっちもいなくなってしまったのだ。無理矢理夫婦になるなど、青木様の土地に居て出来るはずがない。当たり前ではあるが、ここでは青木様が絶対なのだ。不毛の土地と思われていたこの土地が、ここまで住めるようになったのは、青木様の財力かあつてこそなのだから。

「よくはわからんが、東京に行くことはそんな一大事なのか……」

そんなことを問わなくても、八重の態度をみればそれは明らかだ。ただ、核心に触れぬまま「そうなのよ、父さん」と、八重は答えた。辰雄は真っ白になった髪を搔くと、再び湯呑みを取り上げて中身を一気に煽った。

簡素な造りとはいえ、雨風は当然防いでくれるし、畳も敷いてあれば、布団も人数分支給していただいている。生きることには不自由しないこの生活に、辰雄はおおむね満足していた。後は……娘が平凡な人生でいいから幸せになつてくれたらこの上ないことなのだが、それは多くを望み過ぎなのかもしれない。

「お前がしたいようにしなさい。どのような形であれ、俺はいつだってお前の味方なのだから」

珍しく一時、隙間風が止んだ部屋の中へと、辰雄のしゃがれた声が広がっていく。

たとえ、同世代の娘たちのように家庭を持って子を産めなくても、八重がそれでいいと思うなら、辰雄もそれで納得するしかない。孫を抱くことは辰雄の密かな夢であったが、これまで周りの人たちより幸せであった分、叶わないことも出てくるというものか。神様というのはいい塩梅でみんなに幸せを分配するということなのだろう。

「ありがとう、父さん」

「いや……なに、いいんだ。お前が元気で帰って来てくれたらそれで」

辰雄はふと八重の母ミツの笑顔を思い出していた。

長野にある、この地によく似た山間の村から着いて来てくれたミツ。料理人になりたいなどと言う夢物語に寄り添ってくれるような優しい女であった。幸せにしてやりたいと思っていたのに、苦労だけかけて亡くなってしまった。生きてさえいてくれたら、美味しいものを食わせてやることも出来たのにと、今でも悲しみが襲ってくる。そう、元氣であつたらずっと一緒に居られるのだ。そうしたらささやかな幸福を積み上げていくことも出来る。それでいいじゃないかと辰雄は白湯を注ぎながらぼんやり昔の事を思い出したりしていた。

そんな風に物思いに耽っていたから、辰雄は八重の表情に気が付くことがなかった。八重は思いつめたように息を小さく吐き出すと、自分用にいれた白湯を口元へと運んでいった。

*

杉並木の終わりに植えられた大きな翌檜は、白亜の館が建つ前からここにあったのだと言う。館が完成した当初は屋根と同じくらいだった翌檜も、今は屋根のてっぺんをも超える大きさまで成長していた。

八重は幹に寄りかかり、杉並木と杉並木に挟まれた道をただひたすら見つめていた。

どこかで野焼きをしているのか、鼻につく焦げた臭い。南風が強いと牧場から牛の臭いが漂ってくるので、それよりはまだマシだった。鹿が煙を嫌がってか館周辺にはおらず、これを見たらハナ様はきつとお喜びになったことだろう。ハナ様は鹿が嫌いな訳ではないが、糞をされることにはずっと不満を感じているのだから。

今朝方、ハナ様はご両親共々東京へ出発された。もちろん結婚の話を進めるためだが、それを知っているのは何でも聞かされている菊と八重だけのはず。この前の話は冗談だと思っていたが、ハナ様は本気で婚約破棄をされる可能性を考えているらしく、二人以外の

誰にも知られたくないと頑なに公表を拒んでいた。

何はともあれ理由は話せなくとも東京へ行くことは正雄に告げておこうと、今こうして八重はじつと道の先を見つめていた。

ずっと一緒にいた正雄に恋心を抱いたのは幾つになった時からだろうか。はっきりは覚えていないが、とにかく正雄が他の女の子と話しているところを見るのは楽しくなかった。青木様が小作や使用人の子供たちの為に建ててくださった尋常小学校へと通うようになってからは、ずうつとだ。その前から嫌だったかもしれない。正雄が妹たちの面倒を見ているのだから、面白くなかったような気がする。

やっと正雄の姿が杉並木の遠い外れに見えてきた。八重は首を伸ばしてその姿をはっきりと認めると、嬉しくてソワソワしだす。

正雄は狐のようなスツキリとした顔立ちをしている。風を受けて佇んでいるときなど、本当に狐の化身なのではないかというくらい、恰好が良くて見惚れてしまうのだ。これはハナ様もそうおっしゃっていて、昔、お稲荷様なのかもしれないという話になり、二人で辰雄にせがみ稲荷ずしを作ってもらって正雄に出して反応を見たことがあった。正雄はいつもと同じように。ぺろりと平らげ、自分をまじまじと観察している二人に嫌そうな顔をして「なんだよ、食っていいって言ったろ？」と不機嫌になるだけだった。

スタスタと大股でいつものように歩いてくる。正雄はいっだって走っているか速足だ。距離がどんどん近寄って来たので、八重は木の陰からひよっこり顔をだしてみる。すると直ぐに正雄は気が付いてくれて、ほんの少しだけ方向を変えて八重の方へと向かってくるのだった。

正雄の背には今日も大きな籠がある。それを下ろしながら近寄ってくると、八重の足元へと置いた。

「どうした？」

正雄の籠には大量の玉葱が入っていた。茎の部分をわざと長く残して乾燥させてあるのは、これから倉庫に持って行って吊るす為だろう。

「これ、吊るすのよね。私も手伝わせて」

「八重は止めておけ」

「え、どうして？ 私にだってこれくらい出来るのよ」

正雄が、ややむきになって言う八重の手を掬い上げるから、八重は驚いて口を閉ざした。正雄は自分の口元まで手を持ち上げてから、はあと暖かい息を八重の冷えた手に吹き掛けた。

「手が荒れるだろ。縛る作業は手から水分を奪っちゃまう」

言い終えてから二人の手から八重の顔へと視線を移した正雄が、八重を見て思わず吹き出した。

「お前、真っ赤だな」

「だって……正ちゃんが」

八重も自分の顔が熱を出した時みたいに火照っているのは分かっていた。指摘されると更に熱くなることも、分かっているのに毎度止められない。

手を握ったままの正雄が顔を傾けて、八重の唇に自分のを重ねると、今度は堪えきれなくなつてケラケラと声を出して笑い出した。まだ触れ合ったままなのに、正雄が笑つて揺れるから八重の唇まで揺れていた。

「熟れたトマトだってそんなに赤くはならねえよ」

「もお、見ないですよ！」

「見えなきやいいのか？ んじゃ、夜、お前んちに行けばいいんだな」

単なるおふざけが途端に空気を緊張させる。正雄の匂わせたものが、八重の顔色を一気に正常へと戻した。

「正ちゃん、あの……ずうっと待っていてくれていてくれるでしょう？ その事なんだけど、正ちゃんはあるの……違う人を見つけた方が良いんじゃないかしら」

笑っていた正雄の顔から笑みが消え、眉間に不満を浮かべて隠しもしない。八重は咄嗟に正雄から目を反らしていた。

「何を言っているのかわかっているのか？」

正雄の声が先程とはまるで別人のように低く重くなったことに、八重は何かをズシンと胸に落とされたように感じた。それは重いだけではなくヒリヒリと痛くて、冷たくもある。

「だって、だって……真ちゃんもお嫁さん貰うんだって聞いたし」

真二は正雄の弟で、その弟が嫁をもらおうと言うことは、いよいよ正雄も親に結婚をせつつかれているに違いないのだ。

「真二は真二だ。俺は俺。待つって言ったろ？俺だってハナや青木様にはご恩があるんだ。うちの家族だってみんなわかってるんだから、気にすることじゃねえ」

正雄とはこのことで何度も話し合いを持っていた。

八重は結婚するなら正雄がいいと思っているが、本人同士がそう思っても多くの場合は親の一声で相手が変わってしまう。

正雄の両親と八重の父は本人たちの気持ちをくんでくれ、二人がそうしたいならそうしたらいいと言ってくれている。

それは正雄が次男であるという事と、八重の父が料理人だから、家を継ぐ云々という話が出ないからだ。とはいえ、いつまでも次男の正雄が家に居るのはさすがに問題なので…出来れば早めに所帯を持ち独り立ちして欲しいというのが本心だろう。

これ以上、正ちゃんを待たせるのは限界。

八重は一年くらいずっとそう感じていた。ましてや、明日からハナ様の待つ東京へ行くとなると、いつ戻れるのかわからないのだ。本当に戻ってこられるのかも、定かではない。

俯いて何も言わなくなった八重に正雄は焦れ「もういい。お前も俺以外の奴と結婚すりゃいいじゃねえか」と吐き捨てた。

八重は思ってもみない返しに思わず面へおもてを上げた。そんなこと、正雄は今まで一度だって言わなかった。一緒に待つと言ってくれるだけだったのに。

「八重が言ってるのはそういう事なんだぞ？言われた方はどう思うかなんて考えてなかったか？」

正雄は不機嫌に言うど屈みこんで、地面に置いた籠を持ち上げ勢いをつけて背中に背負った。中に入っている玉葱たちが中で盛大に騒いだと思っただけなら一瞬にして鎮まる。

「今更、違う女と結婚しろなんて言われても迷惑なだけなんだよ！」

そう言い捨てると、八重の事を見ることなく大股で館の方へと歩いていく。

ちらりと見えた横顔が、悲しそうだったのは気のせいだろうか。

八重は正雄を怒らせることよりも悲しませる方が、嫌だった。呆れられるより、失望されることの方がどんなにか辛い。とにかく、大きく口を開けて楽しそうに笑っている正雄がいい。

狐だった。感情を隠して風に向かっていく狐のようだった。孤高の狐。格好は良いが、八重は正雄が楽しそうにしている時の方が好きだ。

八重は翌檜の木に一人残され、しばらく動けずに正雄の背を見送っていた。小さくなっていくその背中が建物の陰で見えなくなるまで、追いかけることも出来ずに佇んでいるしかなかった。

マロニエの大きな葉がどこからかカサカサとやってきて、翌檜の木にぶつかって止まった。那須野が原の長い冬が始まろうとしていた。



丸太の中心部を引き抜いたような菓子バームクーヘンを切り分けて皿に乗せた。それを持って八重がハナ様のいらっしやる書斎の扉をノックする。

「ハナ様、お茶の時間でございます」

「八重ね、入って頂戴」

東京にある青木子爵邸には那須野が原の館よりたくさんの使用人が居るが、ハナ様のための希望で八重がハナ様の身の回りのお世話をしている。あまりの忙しさに自分の時間がとれないと言う一転を除けば、それは誇らしく嬉しいことであった。

ハナ様は十一月中に婚姻届を出し、十二月半ば、築地のローマカトリック大聖堂で挙式した。

同日正午、披露宴がこの子爵邸において、政治家、大臣、枢密顧問官、外交官、経済界の名手など全約四百人が招かれ盛大に執り行われた。

招かれた人々より贈られた品々を記録し、それに見合った返礼品を選び礼状をつけて送るのが、挙式より三か月経った今でも、ハナ様が目下やらなければならない重要な仕事となっている。もちろん八重はそれを手伝いながら、日常のあれこれをこなす忙殺された日々を送っていた。

冬は山場を越えて最近はず折暖かい日もあったりする。庭にある梅の木はちらほら咲き始めていた。

「そちららに行ってお茶にするわ。八重もお座りなさい。一人で澄まして座っているのは、もううんざりなの」

部屋に入ると左手にあるティーテーブルと椅子を指してハナ様は疲れた顔で指示を出す。八重は正面にあるマホガニーのどっしりした書斎机に居るハナ様に頷いて見せた。

部屋には暖炉があり、くべられた薪から炎が上がっている。暖かな部屋に入ると振り返って扉を閉め、しずしずと菓子と茶のセットをテーブルへと置いた。

「今日は何かしら？」

「バームクーヘンです」

ハナ様は立ち上がりながら、八重にニッコリと微笑んだ。

「≡≡八重の大好きな≡≡バームクーヘンね」

八重は確かにバームクーヘンが好物だった。初めて食べた時に、世の中にはこんなに美味しいものがあるのかと驚いたものだった。

「父さんからです。そろそろレープクーヘンがなくなる頃だと思っからと手紙にありました」

バームクーヘンより固い、クッキーに似たそれはハナ様の好物だった。見た目は外国の菓子そのものなのに東洋の香辛料が入っているので、私みたいだわ。と、いつだったか仰っていた。

「辰雄さんのお菓子は本当に美味しくていけないわね。いつまでだって食べていられるんですもの」

ハナ様は八重の向かいの席へと腰を下ろす。

「さて、二人きりなのだからかしまった話し方はやめて頂戴ね。寂しいったらないのよ。まるで二人で部屋に居るのに、距離を感じて、一人みたいなんですもの」

ハナ様は八重がティーポットから紅茶を注ぎ落すのを見つめたまま、小さく拗ねてみせた。二人の間で紅茶が白い湯気をゆつくりと弧を描くように上がっていく。

「でもハナ様……」

八重が反論しようとする、皆まで言うなと手を振ってそれを遮った。そして向かいの席に座るようにと表情だけで指示を出す。

「わかっているわよ。言葉使いがなっていないと、ここの使用人たちに注意されるのよ。よう？ これだから田舎者とは言われるらしいわね。あの人たちはわかっているのよ。八重と私は姉妹同然に育ってきたのだから、八重を愚弄することは私をも馬鹿にしている

という事を……本当のお馬鹿さんは誰なのかしら？　そうは思わないこと？」

そう言ってハナ様はツンと鼻の頭を上にあげて見せた。しかし八重の方は自分の背後にある扉の方が気になって、ソワソワと振り返ってみたりする。

「誰か聞いているんじゃないかと心配しているのね？　大丈夫よ。何か言われたら私に言わなくては駄目よ？　私が叱ってやるのだから」

「いえ……違うのよ。そんな風に言ったらハナ様の評判が……」

ハナ様はあからさまに嫌な顔をなさって「評判？　私がそんなことを気にするとお思い？　屁の河童だわ。もう一度言うわね、《《屁の河童》》！」と、扉の向こうへとわざと声を張って挑むように繰り返した。

「ハナ様ってば……」

今度こそ振り返って扉の方の様子を窺う八重に、ハナ様はテーブルの上に置いてあった八重の手にそっと自分のを重ねた。

「良いこと、八重は私にとっては特別なのよ。私の可愛い八重を虐める輩が居たら私が許さない。幸い私の夫は独逸人だし、はしたない言葉を使ってもばれやしないんだわ」

八重は重ねられた手を嬉しそうに見ながら頷いた。ハナ様の心使いが有難く心がホカホカと温まる気がした。

二人はバームクーヘンにフォークを入れながら、少しばかり事務的なやり取りをして、やっと甘い菓子を口へと入れた。

「んー、本当に辰雄さんってば美味しいものばかり作るのだから。どう？　辰雄さんはお元氣？」

モグモグと口を動かしながら父の様子を気にしてくれるハナ様に、八重は首を傾げて「実はあまりに忙しくて手紙も書けてないの」と答えた。それは半分事実で半分言い訳だった。日持ちのするお菓子と共に父からの手紙が届く。しかし、八重には父の問いに答えることが出来なくて返事を書くことが段々できなくなっていた。

父の辰雄の手紙は大方、那須野が原の事が綴られていた。

今年が雪が比較的多いとか、珍しく冬に雷が鳴って杉の木に落ちたとか。菊の腰の具合が良くなって、麓の村まで連れて行ったあのそういう話をつらつらと書き連ね、そして最後に決まって『そろそろ帰って来ないのか』と締めくくられていた。

初めのうちは八重も何とか時間を作って返事を書いていたし、手紙の最後に『那須野が原に帰りたいが、とても忙しくいつになるのかわからない』と正直に添えていた。

「元気だと言っていたわ。菊さんの腰の具合が良くないと書いてあったけれど、父は元気よ」

手紙の内容を思い出しながら、父の作ったバームクーヘンを口へと運ぶ。

ハナ様は「あら、菊は腰が良くないのね。お父様に良い薬がないか聞いてみましよう」と、あんなに疎ましがっていた菊への薬を調達することを模索し出す。清満堂のはどうかしら？ とか、丸富のは最近評判が良いと聞いたわとか。

ハナ様は心優しい方なのだ。だから、そんなハナ様を置いて帰りたいとはどうしても言い出せない。

那須野が原を出るとき、八重はこのまま独逸に行くのもやむなしと覚悟をきめてきた。でも、こんな風にしばらく日本に居るならばどうか一日でも暇をいただき、帰れないかと考えるようになっていた。帰ることの出来る距離に居るのだから、希望を持ってしまおう。でも、戻って正雄に会ったら何と云えばいいのだろうか。

正雄に会いたい。喧嘩をしたような状態で離ればなれになってしまい、気まずいまま数ヶ月も経っていた。手紙は二度ほど書いたが、正雄は筆不精で返事はないし、八重も忙しくて手紙を出さなくなっていた。

「ねえ、八重ってば聞いているの？ いくらバームクーヘンが美味しいからってボンヤリし過ぎよ」

ハナ様の声で我に返り「あ、ごめんなさい。なんだったかしら？」と、問い返す。口の中にあるバームクーヘンを慌てて飲み込んだ。

ハナ様は眉尻を下げて困った顔になる「本当に聞いていなかったのね」と、紅茶を口に含んで飲み干した。

「もうすぐ御礼状を送る作業もおしまいになるでしょう？ それを話したら、旦那様が良い機会だし独逸に帰ろうとおっしゃってね。ご両親に私の事を紹介したいし、独逸は良いところだから是非私にも好きになって欲しいと、それは熱心に独逸行きを催促なさるの」

八重はハナ様の話に耳を傾けながら、暖炉でバチッと薪が爆《は》ぜたのを聞いた。それは昔ハナ様が持っていた一ぼっぴん《ビードロ》が壊れた音によく似ていた。パラパラと薄い硝子が碎けて散ったあの光景が目の前に現れて、話に集中することが出来ない。

*

調理室からいい匂いがしていた。玉葱と林檎、生姜、大蒜《ニンニク》を擦り下ろしたものを辰雄が炒めてソースを作っている。その組み合わせでよくこの旨そうな匂いになると、密かに正雄は辰雄の腕に感心していた。

「ども、雪の下から長葱掘り出して来たよ」

通用口から顔を出した正雄に辰雄は顔を向けて「ああ、そこに置いておいてくれ。それより、青木様がお待ちだぞ。お前はいつ頃来るのだとおっしゃってな。もうすぐ来ると話したら、来たら二階の和室へと来るように伝えてくれとさ」と言付けを伝えた。

正雄は自分の恰好を見下ろして、汚れたズボンを叩く。叩かれると付着していた乾燥した土が素直に落ちる。ズボンの裾についていた雪も一緒に床へと落下し、それは混ざって瞬く間に泥水と化する。

「外でやってくれよ」

辰雄は苦言を呈すがなんだか覇気がない。

「ああ、もう落ちきったからこれ以上やらねえけど……。おじさん体調悪いのか？」

正雄は怪訝そうに辰雄を見つめるが、辰雄は首を振って背を向けてしまった。

「歳なただけだろ。いつもいつも元気なわけじゃねえ。肩は凝るし、腕は上がらんし」
「そうなのか……。まあ、今夜はしっかり湯に浸かるんだな」

辰雄は背を向けたまま木杓子でフライパンをかき混ぜながら、なんともないとも言いたげに肩を上げてみせた。

辰雄の様子に正雄が何か言いかけるが口をそのまま引き結び、調理室から小食堂を抜けて廊下へと出る。周り階段をゆっくりと手摺につかまりながら上がって行く。二階に着くと直ぐにある、館唯一の和室の扉をノックした。

返事を待つ間、階段のところにある窓を見れば、先ほどまで止んでいた雪がまた疎らにちらちら舞い出していた。とは言え、晴れているのに降る雪は山の上から風によって運ばれてきたものだろう。

「ああ、誰だ？」

「正雄です。お呼びだと聞いたので……」

「待って居《お》ったよ、入りなさい」

扉越しに会話を交わしてから、正雄は扉を開けた。暖気が待っていたように廊下に飛び出してきて、正雄を包んで消えていく。

和室に置かれた独逸より持ってきたという椅子に青木周蔵様が窓の外を眺めて座っていた。椅子の横には麒麟の描かれた珍しい火鉢が置かれている。

「火鉢の横へ。出来るだけ近くに座るといい」

青木様は背を椅子に預けたまま顔を動かして正雄にそう言った。正雄は頭をぺこりと下げ、青木様の言い付け通り、椅子の斜め後ろ、畳に直に座る。

和室と言っても造りは独逸式で、床が畳敷きなだけである。窓の形も洋風そのものであった。窓から臨む景色は森を切り開いた庭。一面白銀で、庭を囲む木々もしっかりと雪を纏っている。空から舞う雪も、地面や木を覆う雪も、太陽の光を受けて煌めいていた。

「今年は雪が降るな。作物への影響はどうだ？」

「三年前に比べたら可愛いもので、恵みの雪といった具合です。これくらいならかえって大地に水が浸透して悪くないでしょう」

「那須の土地は石ばかりで水を貯めておく力がないのだとか」

「確かにその通りですが、土壌改良に精をだしておりますんで、昔より良いでしょう」

青木さまはご自身の髭を擦りながら、正雄の説明に相槌を打つ。

「お前は昔から勉強が良くできると聞いておった。学校の成績も優秀だったらしいではないか」

正雄は急に学校の事を青木様が話し始めたのに、違和感を覚えながら「ありがとうございます」と、ぎこちなく礼を述べる。

確かに学校の勉強は楽しく、神童と呼ばれるほど出来が良かったのは確かだった。でも、学校を出てしまえばただの農民だ。握るのは専ら鍬や斧である。そりや、学んだことが全く役に立たないかと言われたらそうではない。だが、落第に近い成績だった兄と扱いは大差ない。神などと大それたあだ名をつけられたところで、それを發揮できないならそんなものは意味がないことだ。

「その頭脳を活用してみようとは思わないか」

青木様がそのようなことを言うので、思っていたことが口に出ていたのかと正雄は唇を咄嗟に指で確認していた。動いていた気配はないので、たぶん大丈夫だろう。

「前年の事を覚えておられますし、役には立ってはおります……」

青木様はそこでクスリと笑いを漏らして「わかっておろう？ 私はそんなことを言っているわけではない。いや、わからぬか……」と、自問自答するように言い、紬の中でもやたら手のかかると言われている結城紬を掴んで足を組んだ。

「田畑を耕すこと以外、お前は興味がないのだろうか」

むしろ、青木様は田畑を耕さず、何をしろと言うのだろうか。辰雄のように料理を作ったり、菊のように家の事に従事しろという事か。なんにせよ、考えたことがなく、自分のそのような姿を想像してみると、なんだか眉が痒くなってきて首を傾げながらポリポリと指でひっかいていた。

「そうか、考えたこともないのだな。私はお前にやって貰いことがあるのだよ」

青木様の語尾は毎度笑っているように揺れる。これはハナにもみられることで、嘲笑っているわけではなく、単に言葉尻を柔らかくしているに過ぎない。命令したり叱責したり、そういう時にもなるので癖なのだ。その癖が下々の気持ちを掌握していることには気が付かずやっている。なんとも、柔らかな感じがするお人だった。

ぱさっと視界の端で屋根に溜まっていたであろう雪が落ちて、次の屋根にぶつかった音がした。

「来年になると思うのだが……私は米国《アメリカ》に行かされることになるだろう。明治政府の方針で大使として赴くことになる。どうだろうか、正雄は米国へ行ってみたいとおもわぬか？」

淡々と述べられる事柄は青天の霹靂であり、突拍子もなさすぎて正雄にはなんと答えていいのかと途方に暮れた。それを察し、青木様は「驚くか。驚くであろうよ、当たり前だ」と、理解を示した。

「私一人で行くわけではなく、補助役を何人も連れていくのは毎度のこと。その中にお前も加えたいのだ。米国は英語であるから、お前はこれから死ぬ気で勉強に励まないとならないが、きつと成し遂げると私は思っている。違うか？」

これは正雄にとって身に余る光栄な話なのだ。農民の子として生まれ、農民として生きられないと思っていた。こんなこと四方山《よもやま》話でもしたことがない。しかし、どうして自分にそのような役を抜擢するのか疑問に思う。

押し黙る正雄に青木様は「不思議か。人生というのは時として思ってもみない方向へ曲がることもあるし、選択の余地があるなら思い切った行動をとらなきゃならん時もある」と言ってから「などと勿体ぶつてもな」と、口の端を上げて笑ってみせるが、眼差しはどこか曇りがあり、迷いがあるように正雄は感じた。

「実はな……ハナがとうとう独逸に行くことになったのだ。まあ、結婚した以上、遅かれ早かれと思っていたが……寂しいことだよ」

そこで正雄へ視線を投げてから、正雄と目が合う前に、すぐに窓の外へとそれを移動させる。

「あれは八重を独逸へ連れて行くと思うのだ。昔から八重を連れていきたがる、どこへでも。人形ではないのだからと諭しても、頑として聞かなくて困ったことだよ。……正雄よ、すまぬな。お前たちの仲は知っているのだが」

正雄はやっと事の真相を理解して、そっと目を閉じた。罪滅ぼしという事だ。青木様ら

しい心使いであった。こんな末端の小作人である正雄に思いを馳せてくださったのだ。

ハナは確かに幼い時から八重を離れたがらないところがあった。それをよく奥方様にも注意されていたのを正雄ですら目にしたことがある。青木様の言う通り、お気に入りの人形に近く、一時も離れたくないという具合だった。大人になれば、分別をわきまえそういう事はすこしまシになったのだが……それでも、機会をうかがっては八重を連れ出していた。

そうか、八重は独逸へ行くのか。もう那須野が原に戻っては来ないのか。

正雄は薄く脛を持ち上げると、畳のへりを睨みつけた。

ハナが独逸に行くのならば、当然八重も連れていくだろう。東京にだって連れていったのだから。

八重が行きたいかどうかは関係なく、ハナの思いひとつで決まるのだ。

結局、宿命であり呪縛であり、運命なのだ……諦めるより他ないのだ。農民の、それも小作人の次男に生まれ、八重との結婚は、これだけは叶えられると思っていた夢であった。これならば夢を見ても許されると思っていた。幾度、手から滑り落ちそうになっても離さず掴んできたのに……。

悔しさなのだろうか、不意に涙腺が緩み唇にぎゅっと力を込めた。手を握り絞めても、その手の中には八重の手はなく、代わりに違う人生を握らされていた。

どうにもならない事はこれまでも何度もあった。その都度消化してきた。八重との結婚は……己の気持ちさえしっかり持っていれば何とかなれると思ってきたから、きつと……消化するのに時間がかかるのだろう。どうにも悔しくて、息が詰まりそうだった。

頭を振って、悔しさを追い払うと大きく息を吸う。

「行きます。米国に」

何とも情けないことに絞り出した声は掠れていて、涙声のようであった。

俺は泣いてなどいない。正雄は奥歯を食いしばって己に喝を入れた。

正雄は息を今一度吸い込むと「行かさせてください、絶対に落胆させませんから！」と今度こそはっきりと明瞭に言い切った。

それを聞いて吐き出された青木様の息も震えていたように正雄は感じた。青木様も緊張している。それはそうだ、これは正雄の人生を左右する提案なのだから。心根の優しい青

木様が下した苦渋の決断なのだろう。

「後悔させないよ、お前の英断を私がしっかりと支えていこう。米国より戻って来た暁には、経験を生かした職に……通訳でもなんでも良い職に就けるようにすると約束する。……正雄よ、ありがとう」

礼を言わねばならないのは正雄の方だったが、今はどうしてもそれを口にすることが出来ない。

人生というのは幾多に枝分かれした道だ。これまでとは違う方へと歩き出しただけなのに、後ろ髪を引かれる。八重の笑顔がちらついて今まで見ていた方へと戻りたくなる。

「精進いたします」

気持ちを奮い立たせ、辛うじて口にしたのはそれだけだったが、青木様は「ありがとう」と正雄ごときに何度も繰り返した。

「横浜には洋服店があるし、そこは既製品を扱っているという話だ。横浜で必要な身支度を整えたら早々に米国行き船に乗るように。他の者と一緒に、米国での暮らしが円滑にできるように整えておいてくれ。私もきつと直ぐに行くことになるだろう」

青木様はこれからの手筈を大まかに説明してくださったが、正雄はその一つ一つが頭を素通りするような感覚で聞いていた。

そうか、俺は米国へ行くのか……この地を離れて。

正雄は先ほどまで晴れていた空に灰色の雲がかかっているのを見つめていた。

+++++

今日はハナ様の旦那様が独逸官邸に一晚詰めるという事で、八重はハナ様の寝室へと呼ばれていた。天蓋付きの豪華なベッドに、絹で作られた寝間着姿のハナ様が上機嫌で八重を待ち構えていた。

「やっと来たわね。今日は八重と一緒に寝ることにしたのよ。子供のころよく一緒に寝たわよね？　八重は覚えていて？」

父の辰雄を待つて調理室に居た八重を、ハナ様はよく自室に招いてベッドに入れてくれた。味わったことのないふかふかのベッドに暖かな布団、八重は子供ながらにハナ様との生活の差をはつきりと意識した出来事だった。

「ええ、覚えているわ。でも……ここで寝るのは旦那様に申し訳ないと思うのよ」

「あら、この子ったら、何を心配しているの？　ちゃんと説明して許しを得ているから問題ないわ。さあ、入って入って。懐かしいわ」

八重が入るように掛布団を大きくまくって、本来は旦那様が寝る所を叩いてみせる。八重は戸惑いながらも、どうせ断ってもハナ様は聞く耳を持たないだろうと観念して布団に上がった。

相変わらず比べ物にならないほど心地よいベッド。寝具の手触りも滑らかでいつまでも撫でていたいほどだ。

「ちゃんと肩まで掛けなくちゃ、八重は風邪をひきやすいのに」

仰向けに二人並び、ハナ様は隣の八重にしっかりと布団を掛けて、満足して八重に微笑みかける。八重も、自然と笑みが漏れる。

「昔からハナ様はそう言ってお布団を私にかけてくれたわ。それで翌日ハナ様がくしゃみをして……」

「お母様に叱られるのよ。そう、叱られたわね。』そんなに一緒に寝たいのならば、もう一組寝具を用意させます』って。私は一緒に手を繋いで寝たいと駄々をこねて」

「嘘泣きを」

終わりを八重が言うとおハナ様はおかしそうに笑ってから、昔やった嘘泣きをやって見せて八重を笑わせる。本当に昔に戻ったようで、八重は布団に顔を埋めて声を出して笑ってしまった。二人が笑うとベッドも笑いだす。振動で、ベッドにかかっている天蓋の幕も楽しげだ。

「私ね、毎日毎日本当に楽しかったのよ。八重と遊んで、時々マサも一緒になって走りまわったりしたわよね。家の前の小川で寒いから駄目だと言われたのに、こっそり三人で入ってみんな揃って風邪を引いたわ。まずはマサが治って、次に私、それで二人そろって八重の所にお見舞いに行つて、また騒ぐから……八重の風邪は長引いてね。家で本当に叱られたものよ。知らないでしょう？」

八重は少し考えて「菊さんね、お小言の主は」というと、ハナ様は「みんなよ、みんな」と苦笑する。

「私はね、八重を家に連れてきたいと言つたのよ。要するに引き取りたいという意味ね。そうしたらお父様が本当にお怒りになつて……」

八重は正直、青木様がおハナ様をお叱りになるなんてことは想像できなかった。注意することはあつても、怒つたりなどしないお方だった。特に、ハナ様の事は目に入れても痛くないという可愛がりようだった。

「嘘じゃないのよ。『あの子は人間であつて、人形でもなければ猫や犬でもないのだ。簡単にそんなことを言つてはならん』とおかんむり。その後は滔々とお説教よ。菊が乗り移つたみたいだね。『親というものは子を愛してやまない。その子供を簡単に取り上げられたらどう思う？ 愛するものを失うことがわかるか？ お前だつて、明日お母様がいなくなつたら嫌ではないのか？ 八重が急に消えたら嫌だろう？』とね」

「でも、私もハナ様のお家の子供になれたらどんなに幸せかしらとよく思つていたわ」

ハナ様はふふつと笑つてから「同罪ね。相思相愛とはこういう時に使う言葉だわ」と、機嫌よく言つた。

「私はずっと八重が好きだったわ。だからマサにも嫉妬したものよ」

それは初耳だ。びつくりして八重がおハナ様に顔を向けたら、ハナ様も八重を見ていた。

「恋心ではないの。八重はマサを好きになるし、マサも八重を好きになるし……私だけ蚊帳の外。仲間外れと言うかね、可愛い八重が私の元から離れてしまう事が寂しかったのよ」

「ハナ様……」

ハナ様は、そんな顔をしないで天井を仰いでほほ笑んだ。

「仕方ないのよ、恋をするってそういう事なんだわ。今ならわかるもの。だから、私は二人に謝らないといけないわね。結婚しようと誓っていたのでしょうか？ それなのに、邪魔をってしまったってごめんなさい。こんな私を許してくれる？」

「許すだなんて、そんな」

「怒らないの？ 怒って良いところなのよ。八重は本当に良い子だわ」

宙《ちゆう》に言葉を放つと、ハナ様は暫く言葉の行方を追うようにじっと動かなかった。八重も見えない言葉をみているように同じ所を見つめる。遠くから聞こえてくる犬の遠吠えが空寂しく聞こえていた。

八重はハナ様の気持ちがなくわかるような気がした。正雄への気持ちだって、初めはそういうところから始まっていたのだと思う。いつも相手をしてくれる正雄が違う子、話を熱心に聞いている、そういう事は疎外感を抱く。

「どうして、小さい時のままでは居られないのかしら……」

八重がぼつりと呟くと、ハナ様も「そうね」と呟いた。

「子供時代が永遠に続けばいいのにと願っても、大きくなってしまったわ。私は青木周蔵という父を持ち、八重は辰雄さんの子供だった。一緒に居られない時間が増えていき、嫌でもわかってしまう。立場というか身分というか……そういう馬鹿げたもの。ねえ、八重」

「はい」

「もしも、私が……そうね、正雄のうちの子供でも仲良くしてくれただしょう？」

「もちろん」

「そうよね、そうなんだわ。私だってそうなもの」

そこで急にハナ様が動いて、隣にいる八重を抱きしめた。

「私たちは大人になってしまったのね。知らないでいられば幸せなことを知ってしまい、それを受け入れて生きていく他ないのよ」

話に耳を傾けながら、八重は小さな時、よく潜り込ませてもらったハナ様のベッドの中にいた。人のぬくもりは暖かくて、ハナ様はちよつとだけ石鹸の香りがする。夜は暗く寒くて、それなのにハナ様に抱きしめてもらおうと安心した。幸福感が八重を包んでいた。

「暖かった……一緒に居られて嬉しかった」

そうね。と、ハナ様はぎゅっと更に抱きしめた。今のハナ様は「Fougere Royale」《フジエール・ロワイヤル》の香り。旦那様からの移り香。子供時代は既にはるか遠く、新たな記憶で上書きされていく。

「私も八重がいてくれて幸せだったわ。本当よ。だから、私は八重に恩返しをする時が来たの……解放してあげなくてはいけないわね。ずつと一緒にいることは不可能なんだから」

八重を腕の中から放してハナ様はわずかに身を引いた。月明りに浮かぶハナ様は薄っすら涙を浮かべて八重をまじまじと見つめて、ほほ笑んだ。

「八重、可愛い八重。いつこんなに美しくなったのかしら。私の小さな妹ちゃんだったのに。私はね、あなたを独逸へ連れて行くのはやめたのよ。本当はずつと前から連れて行かないと決めていたの。だって……私たちは大人になってしまったのですもの。私は旦那様のものだし、八重はマサのものだわ」

ハナ様の言葉は胸に刺さって、八重も涙が浮かんできた。それぞれの道を進む時が来たのだと暗にハナ様が言うてくださったっているのだ。ずつと付き従うことが運命だと思っていた八重にはそれは少しばかり寂しくもあった。もう一緒に居られない、そう思うと更にはらはらと涙がこぼれ落ちてきた。

「泣いているの、八重？ 私も泣きたくなってしまいわ。泣かないで……私の決断が揺らいでしまうじゃないの。泣かないでよ」

そう言つてハナ様も涙を頬に伝わせていた。頬を預けた枕に落ちていく。

「八重は本当に泣き虫だわ、もう……本当に……」

涙声でハナ様が責めるから、八重は涙を人差し指で拭ってから「ハナ様だって昔はとて

もよく泣いていたわ」と反論する。

「菊のせいよ。本当に昔は厳しかったわ。物差しでピシヤリと叩くのよ？」

「ええ、私それでこっそり物差しを裏のお庭に埋めたの」

「だから無くなったのね。八重ってば」

二人は涙を浮かべたまま笑い合った。

この夜がいつまでも続けばいいのにと八重は願った。

それでも昔話に花を咲かせていると、夜の闇は次第に影を潜め空が白んでくる。朝と言ってもいい時間、二人は小さな子供のように手を繋ぐ。

「八重、那須野が原に戻っても忘れないで頂戴ね。私、絶対にあの場所へ帰ってくるわ。あの翌檜の下で、会いましょう。鹿を指差して文句を言わなきや……」

ハナ様は眠そうにそう言って、目を閉じた。

「待っています。八重はいつまでもあそこにおります」

八重の返事を聞いて、ハナ様は目を閉じたままほほ笑んだ。

*

でこぼこ道を人力車が一台、那須野が原を駆け抜けていく。勾配はきつくはないとはいえ、上り坂。はやる気持ちを抑えきれない八重はじっとしていられず、やや身を乗り出すように雪が解け始めた高原を見つめていた。

「これつきりつてことはないのよ。そうでしょう？」

ハナ様はそう言って、しかし今生の別れを惜しむように涙をこぼして八重の手を握っていた。港まで見送ることなく東京で別れることになったので、ハナ様の旅立ちの朝、八重も那須高原へと戻ることになった。

「Lass uns langsam gehen 《そろそろ行こう》」

「Aber 《でも》……」

後ろで二人の別れを見守っていたハナ様の旦那様であるトラツヘンベルヒ伯爵が渋るハナ様の肩をそっと撫でた。

「また会えるわ、お待ちしておりますから。八重は那須野が原にずっとずっといます」

そう言うってから八重が先に手をすりと抜いた。トラツヘンベルヒ伯爵は礼を言うように八重に頷いたので、八重も頷いた。

「Herzlichen Glückwunsch zur Hochzeit 《お幸せに》」

「Danke schön 《ありがとう》」

八重の拙い独逸語にっこりとほほ笑んだトラツヘンベルヒ伯爵は自分の腕にハナ様の手を乗せてその上から自分の手を添える。八重は柔らかな感触を失ったその手を自分の体の前で握りしめると頭を下げた。

「いってらっしゃいませ、ハナ様」

八重の後ろに控えていた館に使える多くの使用人たちが、同じように頭を下げた。

ハナ様は何度も振り返って二頭立ての馬車に乗り込み、船の出る横浜港へと出発された。目の覚めるような山吹色のドレスで遙か遠い異国の地、独逸へと旅立たれたのだった。

八重はハナ様を見送った後、東京駅へと行って汽車に乗った。汽車で三時間の距離にある西那須野駅を目指した。ハナ様の計らいで八重は二等車に乗って戻ってくる事が出来た。

そして、西那須野駅で待機している人力車に乗せて貰い、今、那須野が原に戻ってきた。

那須野が原は何も変わらず、いつもと同じように冬を終えようとしていた。木々から雪の名残の雫が滴り落ちていて、雪だまりを水玉模様に変えている。鳥たちが人力車に驚き飛び立つと、枝がぴよんと跳ねて雪がパラパラと落ちていった。

ハナ様との別れは辛かったが、これは永遠の別れではない。八重はそう気持ちを切り替えて、今は父辰雄との再会、それと正雄と会えることが嬉しくて仕方がなかった。

戻ってくる前に東京から帰郷の旨を手紙にて伝えてあったが、もう届いているだろうか。

正ちゃん、怒っているかな……。

喧嘩別れとまではいかなくても、ぎくしゃくしたままだった正雄へと思いを馳せる。あと少し。

八重は戻ったら正雄に謝罪し、女から申し出るのはいささか恥ずかしいことだけれど、結婚を申し込むつもりだった。

頭を下げて、お嫁さんに貰ってもらおう。だって、これからずっと那須野が原に居られるのだから。

八重は冷たい風に頬を赤く染めて、那須野が原の風に吹かれていた。

+++++

小さな女の子が地べたに足を投げ出して座っていた。

青々とした草が辺り一面を覆っている。風がそよそよと山へと上がって行く。すると大きな翌檜の木が子守唄でも歌っているつもりか、優しく葉を擦り合わせて囁いている。

女の子は座ったまま手当たり次第手に触れるもの、大方草を引きちぎってはポイっと投げた。それもまた山へと向かう南風がそっと運んで行く。

「千鶴、そろそろかしらね？」

女の子に語り掛けた後、八重はすぐ横で辞書と睨めっこをしている正雄に「ねえ、あなた。きつと今日ではないんだわ。きつとそうなのよ」と声を掛けた。

正雄の方は辞書から顔を上げずに、手紙には今日って書いてあったのだろうと、ぶつぶつと返した。

八重は耳を澄ませ、杉並木の先を見つめた。

二年前、菊と一緒にここ青木邸にある主寝室の床磨きをしていた。

菊は腰が痛いと言って八重を自分の手足のように使うだけだった。それでも口の方は元気でやれここが磨けてない、こっちの隅が埃っぽいと、八重に檄を飛ばす。八重は這いつくばってたわしでゴシゴシとそれはもう一心不乱に磨いていた。景気よく磨くものだから、部屋の中は八重の床磨きの音で満たされる。

「あんまり怒らないでやってよ、菊さん」

聞き覚えのある声が背後からして、八重の手はピタリと止まる。

「おいでなさったか」

菊がそう返すから、八重は聞き間違えではないことを知り、屈んだままぐるっと振り返った。

「正……ちゃん」

背広姿の正雄は今まで見た中で一番輝いて見えた。戸口に立って少しばかり照れた顔をして「ただいま」と、正雄は被っていた帽子を取り胸の前で抱えた。

「ただいま……って」

八重には自分でもその後自分でなんと言いたかったかなど、わからない。ただ、もういともたつてもいられずに立ち上がると、正雄の胸へと飛び込んでいた。

「ああ、帽子が……」

ボヤいたのは菊で、正雄の方は空いている片手で八重をしっかり抱きしめてくれていた。

「お前が待っているって聞いてたから……」

「正ちゃん、居なくなっちゃって……居なくなっちゃってたから……正ちゃん」

八重は自分がさつきから何が言いたいのか、何が伝えたいのか、どうしたらいいのか混乱しきっていた。涙でせつかくの正雄の顔はしっかりと見られないし、頭の中は霞がかかっってしまったっているし。とにかく、正雄が目の前にいて、自分を抱きとめてくれていることが夢みたいだった。

「だから、ちゃんと貰いに来たんだ。約束したろ？」

俯いて苦笑する正雄を見上げた八重の顔は涙でぐちゃぐちゃだった。

「私がここにいることを忘れて貰っちゃ困るんだがね……」

菊が椅子に腰を下ろしたままぼやいたが、口調は幾分楽しそうであった。

二年間青木様の米国滞在にお供した正雄は、八重が独逸へと行かなかったことを聞いて、米国から帰国した足で那須野が原に戻って来たのだった。

二人は今度こそ夫婦になり、子供を一人もうけた。それが千鶴だった。その千鶴ももう数えて二歳になった。

普段は東京で通訳として忙しく働いている正雄が、今日は那須野が原に戻って来ていた。それは一通の手紙が届いたからに他ならない。

『拝啓、親愛なる私の八重』

日に日に寒さが和らぎ、独逸の厳しい冬が終わろうとしています。

まずは出産おめでとう、よく頑張ったわね。私の八重が生んだ小さな赤ちゃんを早く抱きしめたいです。

父の話では小さい時の八重にそっくりなのだとか。良かったわ、正雄に似たら狐さんになつてしまうところです。男ならそれも悪くはないわね。

正雄と言えば、貴方が出産したことをとてもそっけない電報で教えてくれたのよ。

“コ ブジ” こんなのってないわよね？ そういう訳で、私は可愛い八重の赤ちゃんを抱きしめなくてはならないし、正雄を叱らなくてはならないので、那須野が原へ向かいます。

辰雄さんにお菓子をたんと作るように伝えておいてください。どういう訳か、私は本物の独逸のお菓子よりも、辰雄さんの作る独逸菓子が好きなのよ。きつと半分日本人だからだと思います。

私の日本人の血が、那須野が原を恋しがって毎日泣いています。

だから、八重を抱きしめて癒して貰わないとなりません。

航海が順調にいけば、五月一日に横浜について、翌日には貴方を抱きしめられる予定です。

約束を覚えているかしら。翌檜の木の下で、もう一度会いましょう。

今度は可愛い八重の赤ちゃんともワルツを踊るつもりです。

八重の姉、ハナ』

ざっざと、新緑の那須野が原に馬車の音が響きだす。

八重はぴんと首を伸ばして、慌てて娘の千鶴を抱き上げて翌檜の木の下に立った。

「やっと来たか。それにしたって、そんなに首を長くしたって飛んできやしないんだ、落ち着いたらどうだ？」

正雄は読んでいた米国の辞書を自分の傍らに置くと、下から八重を見上げた。一心に杉

並木の先に視線を投げている八重は既に泣き出しそうで、正雄はフツと笑いを漏らして、自分も立ち上がる。

「四年ぶりか」

並んで立つ正雄が、八重の腕の中から千鶴を譲りうけて、肩車をした。

「行っておいで」

正雄の言葉に背を押され、八重は一步、二歩と歩みを進める。そして、どんどん近寄ってくる馬車に向かって堪えきれず走り出した。

「はは、千鶴。母は父よりハナ様が好きだよ。困ったやつだな、本当に」

正雄は苦笑しながら言うと、母親の興奮が移ったようにじたばたする娘を肩から胸に下ろし、大きく手を振りながら走っていく八重の後ろ姿をのんびりと追いかけていった。

終わり

※この作品は史実に基づき書いている部分もありますが、フィクションです。